

2011年 8月23日・「山陽新聞」では

生命の重さ問う叫び

アンソロジー「命が危ない 311人詩集」出版

自殺や児童虐待、東日本大震災、福島第1原発事故と生命の価値が問われ続けている現代。全国の詩人が、社会の現実に向き合い、生命の重さをうたったアンソロジー「命が危ない 311人詩集」（コールサック社、2100円）が出版された。

「原爆詩一八一集」（2007年）や「大空襲三一〇人詩集」（09年）など、社会問題をテーマに公募詩集を手掛けてきた同社の企画。白河左江子、くにさだきみ、山下静男ら郷土のベテラン詩人や壺井繁治（香川県出身）、高橋小夜子（岡山県出身）ら物故者を含む311人による計379編を収録した。

〈女はそうやって産み／産みつけてきたのに その産道は／ついに原子力発電所までつづいていたのか〉と嘆く高良留美子「産む」に始まり、虐待やいじめに遭った子どもの悲鳴、非情な企業論理に身をすり減らす労働者のため息、苦難の時代を生き抜いて生涯を終えた伴侶に注ぐ涙、そして、それでも力強く歩き続ける希望…。全13章にわたり、さまざまな生命の情景がつづられていく。

〈被災地は（被災地のうえに 被曝地にされて）／すべてを 奪われ 攫^{さら}われた〉とつづるくにさだの「丸裸で 佇つ」をはじめ、震災と原発の章は悲痛な言葉が続く。「心からわき上がる言葉で、物事の本質をつかみ出すのが詩。その叫びを通して、最も根源的であるはずの命の意味を考え、将来を開いてほしい」と同社の代表で詩人でもある鈴木比佐雄は力を込める。

（大石哲也）

と紹介されています。